

岡山大学の開放制教職課程が育てる教師力

-基盤となる3つの力・18の項目・30の指標

4年間の教職課程で育む「教師力」を、本学では「基盤となる3つの力・18の項目・30の指標」として構造化・可視化しています。

まず「基盤となる3つの力」とは、「教育実践力・対人関係力・自己深化力」です。本学開放制教職課程では、なによりも「教育実践力」を重視します。これは卒業後、皆さんが教壇に立つとき、学習と生活の両面で生徒の状況を適切に把握し、著しい支障なく授業を実践できる力量を育てておきたいからです。次に「対人関係力」と「自己深化力」とは、将来的に教職に就く／就かないにかかわらず、本学の開放制教職課程を履修する全ての皆さんに身につけてほしい「人間力」です。

以下、それぞれについて確認しておきましょう。文中の①～⑱は「基盤となる3つの力」を構成する「18の項目」を示しています。

(1) 教育実践力

「教育実践」とは非常に多岐にわたる概念ですが、ここでは「授業力」と「生徒理解」の2側面で捉えています。

まず「授業力」では、①教材研究力、②授業構想力、③授業展開力、④授業評価力の4つに加え、⑤教育課程とは何かという概略を理解する力が必要です。

このうち、①教材研究力は授業づくりの土台となる力です。教科の内容を構成するひとつひとつの教材・題材について、その学術的な背景を理解するとともに、学習者の力量や学習指導上の課題を想定した教材研究が必要です。皆さんが個々の専門学部にも所属している強みは、教材や題材の学術的な背景を、より深く、専門的かつ研究的に学んでいることにあるのです。

教材研究力を基盤として、②授業構想力では、特に学習指導要領を踏まえ、適切な学習指導案を書けることを求めています。「学習指導要領」とは、全国のどの学校でも一定の教育水準を保てるよう、文部科学省が定める教育課程（カリキュラム）の基準です。これに対して「学習指導案」とは、1時間の授業を展開する基本的な設計図であり、教師自身が作成するものです。

教師には「単元のまとまりで授業を構想する力」が求められています。単に1時間の授業で完結した学習指導案を書ければ良いものではありません。数時間にわたるひとまとまりの「単元」として授業を構想し、その単元を通して生徒に育むべき資質能力が何かを説明できる必要があります。特定の知識・技能・技術に生徒を習熟させることが「授業」ではないのです。

社会科を例に考えてみましょう。社会科は一般に「暗記科目」と捉えられがちです。しかし、この考え方は誤っています。社会科の目的は、生徒に一定の社会認識や歴史認識を育むことにあります。その社会認識や歴史認識を用いて、生徒が主体的に社会と関わり、豊かで批判的な思考を展開できるようになることこそが、社会科の目的なのです。

同じことを、あなたが専門としている教科についても考えてみましょう。その教科は、なぜ学校教育に必要なのでしょうか？ また、その教科を生徒に学習させることで、生徒

にどのような資質能力を育むことをめざしているのでしょうか？ 学習指導要領解説の総則編と教科編に目を通すことで、あなたが専門とする教科がめざすところを、まずは正確に把握しておきましょう。

教材研究力と授業構想力の基盤のうえに、さらに③**授業展開力**が必要です。授業展開力とは、効果的な板書や発問等、基本的な授業技術を理解し実践できること、「導入→展開→まとめ」といった流れに沿って授業を展開できる力です。ただし、これは単に授業を上手にこなすためのノウハウだけを言うものではありません。どのような授業技術・方法も、これを支える「基本的な考え方」があります。この「基本的な考え方」の中にある授業観・学習観を理解することが大切です。そのうえで、授業者ひとりひとりの個性が生き、生徒の課題や状況に応じた学習指導を創造し展開できるようになることが大切です。

④**授業評価力**とは、自ら実践した授業や、他の人が実践した授業を、客観的かつ公正に評価し、さらなる改善に生かす力です。授業の善し悪しを「判定」することが目的ではありません。実践した授業をどのような視点から、どのように解釈すべきか、またその成否の原因や背景をどう理解すべきか、という問いを大切に、客観的で公正な評価ができる力を身につけることが必要です。そのうえで「より良い授業とは何か？」を求めて、自分と他者との間に豊かな対話が生まれることが、本来あるべき評価です。

以上の①**教材研究力**、②**授業構想力**、③**授業展開力**、④**授業評価力**を総合して「授業力」と言うことができます。これに加えて、さらに教科指導以外の領域（「特別の教科 道徳」、総合的な学習（探究）の時間、特別活動）を含めた教育課程の全般について、その概略を理解し、教育課程編成や「カリキュラム・マネジメント」のあり方に関する基本的な事項をおさえることも必要です。本学ではこれを⑤**教育課程**という項目で重視します。

ここまで述べた「授業力」は、どちらかという「授業者の論理」に立ったものです。しかし、より良い授業を実現するには「学習者の論理」、つまり、生徒に対する適切かつ深い理解が欠かせません。⑥**学習者理解**とは、学ぶ側の発達段階や興味・関心、そして学習上の特性や課題を理解することです。その際、生徒を「個人」として理解することと、「学習集団」として理解することとの両面が必要です。さらに、特定の教材を学習する際、その基盤となる既習事項の定着状況や、その教材の指導上の難しさを、個々の教科教育学の研究成果に基づいて把握しておくことも必要です。

加えて、学校生活全般における生徒の課題を、個人として、あるいは集団として適切に理解することも必要です。ただし、教職課程では、生身の生徒と触れ合いながら研鑽を積む機会は、4年次の教育実習を除いて極めて限られています。従って、⑦**学級経営・生徒理解**に関する基礎理論や知識・技能を身につけることに、まずしっかりと取り組むことが求められます。

(2) 対人関係力

「対人関係力」とは、「他者との関わりを自ら紡ぐ力」です。そこでまず必要なのは、⑧**コミュニケーション**の力、つまり、物事を論理的に考え、言葉で表現する力です。また、コミュニケーションには双方向性が重要です。自らアウトプットするだけでなく、相手の状況を感じたり、相手の言動や考えを引き出したり受け止めたりする「積極的な受け身のコミュニケーション」も、アウトプットすることと同じくらい大切です。

皆さんが教員免許を取得するには、4年次に教育実習を必ず履修することになります。また本学の開放制教職課程では、1年次の9月～10月に母校に戻り、授業観察と恩師へのインタビューを行う「母校訪問」が必須となっています。その際、社会人にふさわしい挨拶、服装、言葉遣い、時間厳守といった基本的な言動を実践できることも、重要なコミュニケーション力となります。

次に大切なことは、⑨**リーダーシップ／フォロワーシップ**です。リーダーシップとは、集団で活動する際にメンバーを牽引する力です。独断専行で課題解決する力ではありません。メンバーの思いを束ね、誰もがやる気を持って取り組める状況を整えたり、課題解決に必要な方向性を示したりする力です。これに対してフォロワーシップとは、集団やリーダーの動きを自ら進んで支え、課題解決に貢献しようとすることです。置かれた状況や立場によって、また所属している集団によって、リーダーシップを発揮すべき時と、フォロワーシップを発揮すべき時は異なります。また、リーダーシップやフォロワーシップにかかわらず、集団の中で他者との関わりを紡ぐ際には、率先して自らの役割を見つけたり、逆に与えられた役割をきちんと遂行したりする**⑩役割遂行**も大切な要素となります。

このほか、本学の開放制教職課程では、⑪**保護者・地域連携**に係る基礎理論・知識を身につけておくことも重視しています。これも大切なコミュニケーション力のひとつです。限られた教職課程のプログラムでは、実際に保護者や地域社会と連携・協働する機会は、まずありません。しかし今日、学校の教育活動を円滑に進めるには、保護者や地域社会との連携協力がますます欠かせないものとなっています。この点について基本的な見識を持ち、理解を深めておくことが大切です。また、近年では「チーム学校」という考え方のもと、複雑化・多様化した学校の課題に対して、校外の専門家と連携・協働することや、校内の校務分掌のあり方を再構成することも必要になっています。以前にも増して教師の対人関係力が問われる時代となっているのです。なお、保護者・地域連携に係る事柄について研鑽を積むためにも、教師教育開発センターが提供する学校支援ボランティア等の機会を積極的に活用することを勧めます。

(3) 自己深化力

「自己深化力」とは、適切な視点と方法を用いて自らを反省し、より良い価値を求めて自己を向上させようとする力です。本学の開放制教職課程では、教育者にふさわしい**⑫使命感・責任感・教育的愛情**、**⑬教育の理念・歴史・思想**、**⑭学校教育・教職の意義**、**⑮現代的教育課題**の4点について、その基礎理論や知識を身に付けること、あるいは自分なりの見方・考え方を持てるようになることをめざします。

まず、教育者にふさわしい**⑫使命感・責任感・教育的愛情**とは、教職の根幹を成す人間性の涵養を求めたものです。教職とは生徒のより良い成長と発達を支え、また導いていくものであるとともに、生徒のより良い変容に立ち会うことのできる高邁な職業であるということです。そのような営みに関わろうとする自覚と責任が大切です。

次に**⑬教育の理念・歴史・思想**とは、「教育とは何か?」、「教育の本質とは何か?」、「教育にはどのような可能性があるのか?」といった理念的・原理的な問いをもつことの大切さを訴えています。このような問いに対して、いわゆる「教育観」をめぐる歴史・思想に学び、「何のための教育か?」について、自分なりの見方・考え方をもてるようになります。

よう。

教職をめぐる原理的な理解に対し、⑭**学校教育・教職の意義**では、不易としての教職の魅力ややりがい、教師の役割と責任に対する理解はもとより、流行としての現代社会における学校教育の社会的意義、そして「チーム学校」の理念に基づく現代的な教師役割等について理解を深めることが必要です。職業としての教職の社会的意義や役割、そして教師の職務内容を踏まえつつ、同時に教職の魅力に触れながら、教職に対する自らの適性を見極め、教職志望者として学校を客観的に理解できるようになることが必要です。

さらに⑮**現代的教育課題**では、移りゆく社会状況の中で、現実が生じている様々な教育課題を感度高く捉え、これに対して自分なりの見方・考え方をもって向き合えるようになることが必要です。

教師には、専門職として求められる資質能力を高めるべく、常に自己研鑽できる力が求められます。⑯**向上心・探究心**に示しているとおおり、教職に向かう自己の課題を、まずは適切かつ客観的に把握できること、そのための視点を持つこと、さらにその解決に向けて学び続ける姿勢をもつことが大切です。また同時に⑰**自己管理**にも示しているとおおり、心身を適切な状態に維持できることも必要です。心理的・精神的に大きな負荷のかかる事態に遭遇したとき、前向きに対処したり、場合によっては一歩引くことによってストレスを軽減したりできるようになることは、教職に限らず必要なことと言えるでしょう。

以上のような自己深化を支えるのが⑱**リテラシー**です。リテラシーとは、単に知識の多寡を言うものではありません。遭遇する課題に対して、身につけた知識・資源を繋いだり組み合わせたりする方法を身につけていることが必要です。皆さんはその方法を、皆さんが所属する専門学部で学んでいるのです。「問題設定→仮説構築→資料・情報収集→分析」という一連の方法は、研究的に課題解決する「研究的実践力」です。この力を高めるには、良質の情報に自らアクセスできる方法や、ICT・情報機器及び教材の活用に関する基礎理論・知識を身につけておくことが重要だと言えるでしょう。

以上、本学の開放制教職課程で育もうとしている「教師力」について解説しました。本学では皆さんの教師への育ちを「30の指標」で自己評価することになっています。これが14頁および82・83頁に示す「全学教職課程自己評価シート」です。

2年次以降、毎年度末に、本学教職課程での学修を通して、皆さんがどのように成長したかを5段階で自己評価してもらうことになっています。30の指標のそれぞれについて、学年を追うごとに自己評価の数値が上がっていくことは、ひとつの理想像と言えるかもしれませんが、しかし、30の指標が示す設問文への理解が、学年を追うごとに深まって行き、それゆえに安易に高い点数が付けられず、数値が下がってしまう場合もあるでしょう。それはある意味で、立派な成長を示しているとも言えるのです。大切なことは、「なぜ自分はその数値に○を付けたのか？」という理由と根拠を、丁寧に言葉を尽くして説明したり解釈できたりすることにあります。そのような意味での「対話による評価」を大切にしてほしいと思います。